

# ケータイ・コミュニケーションの行方

北田 暁大  
社会科学系講師

「IT」をめぐる言説の奇妙な明るさについて

「IT革命」という何やら恥ずかしげな標語が、社会やコミュニケーションの深層構造を変えていくというふれこみで、世に出回っている。経済のグローバルゼーションに乗り遅れまいとする政府の焦りと意気込みはそれなりに理解できるものだから、べつだん茶々をいれるつもりはない（「政府は、結局70年代以来の公共事業の論理でしかインターネットを理解していないのではないか？」という、少しばかり気の利いた批評家なら思いつきそうな批判的言説も、もはや陳腐になりつつある）。正直な話、経済システムの問題としてみた場合の「IT」が、どのように位置付けられ、どのような展望の下に捉えられるかといったことは、私にはまったく分からない。メディア史・コミュニケーション史を専攻する者として、多少気になっている事柄についてご

く簡単に述べてみることにしたい。

## メディアへの恐怖

考えてみれば、今日パソコン・携帯電話を主要メディアとして展開されている「IT」化現象は、メディア史的にみればとても特異なものといえる。

明治期以降、私たちの社会に移入されてきた様々なメディア（映画、レコード、ラジオ、テレビ、電話、雑誌、マンガ…）は、その草創期において必ずといっていいほど激しい道徳的批判の矢を向けられてきた。たとえば、映画。明治末に活動写真として導入された映画は、当初、浅草などの盛り場を拠点としていわば見世物として民衆の人気を集めていた。そうした見世物としての活動写真は—多少語弊があるかもしれないが—「都市下層」のんびとが集う公共圏であり、タバコの煙と食い散らかされた菓子、酒と「街の女たち」の匂い、弁士の声と観

客の笑い・怒号とが混在する雑然とした空間であったことはよく知られる。時の政府や知識人は、当然のことながら、かかる「民衆の公共圏」の道徳性に懸念を抱き、若者や女性を映画館から引き離そうとしていた。現在では映画の内容についてその道徳性が云々されることが多いが、当時の文脈ではむしろ、映画というメディアそのものが「非道徳的」なものとして糾弾の対象となっていたのだ。映画という新しい感覚経験を可能にするメディア、それに興じる民衆の身体性への恐怖—こうしたものが、知識人・政府による映画批判を駆動させていたといえよう。

メディアの草創期に生起するメディアへの恐怖—「婦人雑誌を読み耽る女性の道徳的墮落」|マンガ・テレビに熱中する子どもの反社会的性格」など—の表明は、ほぼ例外なく近代メディアの歴史のなかで繰り返されてきた。新しい身体経験を可能にし、慣習的なコミュニケーションのスタイルを瓦解させてしまう装置＝メディアは、つねに、社会的マジョリティにとって不気味な存在であり続けてきたのである。

### 「IT」言説の奇妙な明るさ

こう考えたとき、現今の「IT」ブーム

の奇妙さが、浮かび上がってくるのではなかろうか。「IT」を巨大な公共事業としか考えていない人たちはともかくとして、現在の大人(社会的マジョリティー)たちの大半は、妙にメディア＝パソコンに「甘い」のだ。もちろん、「wwwなんかじゃ世の中よくなるはずもない」|人間関係が希薄化する」というありがちな批判を投げかける人も少なくないが、基本的な論調は「パソコンはうまく使えば、可能性がある」といったものだろう。「市民的公共圏の場としてのインターネットは、現段階では不十分だが、ちゃんとしたメディア・リテラシー教育をしていけば大丈夫」といった議論の落としどころが、(往々にして自分自身はパソコンを使いこなせていない)大人たちにどういうわけか共有されている。それは、映画の年齢制限とか、Vチップのようなマスメディアを規制する論理で、インターネットも「道徳化」することができるという根本的に倒錯した信仰以外のなにもでもない。「IT」をマスメディアと同じのものとみる感性(と、マスメディアを道徳的に馴致してきたことへの屈折した自信)が、おそらく「IT」に対する恐怖を漂白してしまっている。「IT」の可能性を確信しているから「甘い」のではない。むしろ「IT」を徹底的に知らない

からこそ恐怖を抱かずに済んでいるのだ。

### 非難されるケータイ／肯定される「IT」

このことは、携帯電話に対して比較的素直に表明される恐怖と対照してみれば分かりやすい。人と対面的に接していないが突如として携帯電話で話し始め、ちょっとでも暇ができるとおもむろにケータイを取り出す若者の姿に対する違和は、とても素直に語られている。対面的コミュニケーションの文法を突き崩し、ただただ「繋がっている」ことを確認せんがために遂行される自己回帰的なコミュニケーション—それは、何らかの機能的な目的に仕える道具としてのメディア像を切り崩し、大人たちに不安を抱かせる。しかし、考えてみれば、ケータイが可能にするこうした自己回帰的な関係性（コミュニケーションのためのコミュニケーション）は、CMC（Computer mediated communication）のあり方とまったく同型のものなのではなからうか。チャットや掲示板への書き込みをルーティン化し、一日とてパソコンから離れることのできないヘビー・ユーザたちの日常は、まさしく「ケータイ的」なコミュニケーション空間に没された世界といえよう（この世界のあり方を単純に「引

きこもり」などと表現してはならない。マスメディア時代におけるオタク的「引きこもり」と、ヘビー・ユーザたちの生きる現実とはまったく異質なものである）。にもかかわらず、どういうわけかケータイは非難され、パソコンはその未来を雄弁に語られるのである。

ケータイ・コミュニケーションを忌避しつつ、パソコンのバラ色の未来を語る人たちは、おそらく、CMCをマス・メディア的な論理のなかに回収してしまっているのだ。それは、繰り返すが、完全な倒錯である。自己回帰的なコミュニケーションは、マスメディア的な処方箋（著作権・規制）からつねに逃れ出る過剰さを内包している。「IT」を無肯定するにせよ否定するにせよ、まずはこの過剰さに恐怖するところから始めなくてはならない。

ケータイにとりつかれた若者が不気味なのではない。社会が、「IT」の不気味さに恐怖しないでいられることこそが、もっとも不気味なのである。

（きただあきひろ 社会学）